

4月の輸入量 生鮮野菜24%減 中国産の需要 低下影響し

果実はリンゴなど増加

財務省貿易統計（左表）によると、4月の輸入量は生鮮野菜で6万5007ト、生鮮果実16万8742トとなり、前年に比べてそれぞれ24%、2%減少した。生鮮野菜では輸入量シェアの54%を占める中国産が26%減少。中国産は業務用で利用されることが多く、新型コロナウイルス禍による外食需要の低下が大きく影響していると見られる。一方、生鮮果実では増加する品目も見られた。

生鮮野菜のうち輸入量が前年比で大きく減少しているのは、タマネギ、ニンニク、ネギ・リーキなどで、どれも中国からの輸入が中心。「中国産は船便での入荷が主体。同国でのウイルス感染拡大の当初は物流に影響があったが、輸入量減少は業務用需要の減退が大きい」と商社。それだけに、回復には「まだ時間がかかるのでは」と見る。

コリーは約2割減少。メインの米国産も約2割減少したが、「国産に不足感がなく、ニーズが強く

リン産は生産量の減少に加え、外出制限による労働者不足、物流の停滞などが影響し、5%減少した。6月はウイルス禍による影響は軽減されると見られるものの、生産量は大幅には増えない模様。一方、中南米産は順調に入荷する見通し。アボカドは中心産地のメキシコで、船の運休などにより26%減少した。

ら、収穫・選果作業には影響がなかったという。直近5年間の輸入量はオレンジで最高となり、グレープフルーツでは16年に次ぐ高水準となった。シーズンが始まった。キウイも出荷順調で、5年間で最高の出荷量を記録した。

シコで、船の運休などにより26%減少した。一方、増加したのはオレンジ、グレープフルーツ、リンゴ、キウイなど。このうち、リンゴは前年の約6倍となる911ト。メインのニュージランド産は、ゴールデンウィークに合わせてサプライヤーが出荷量を増やした。このうち大手のフレッシュコ社では2・5倍に増加。同国でもウイルス感染拡大によるロックダウンが行われたものの、リンゴ産業が重要産業と指定されたことから

生鮮野菜輸入量の約4分の1を占めるカボチャは前年比7%減少。このうちニュージーランド産は5%減。ウイルス感染拡大にともなう外出制限で収穫や選果作業が滞ったことに加え、船便の遅れなどが影響した。メキシコ産も船便の遅れなどで43%減。メキシコ産は6月中下旬頃まで入荷が続くが、「ウイルス禍による影響が解消されても、作付面積の減少に加え天候不順による不作で前年比1割くらい減少しそつ」との予測。プロッ

生鮮野菜輸入量の約4分の1を占めるカボチャは前年比7%減少。このうちニュージーランド産は5%減。ウイルス感染拡大にともなう外出制限で収穫や選果作業が滞ったことに加え、船便の遅れなどが影響した。メキシコ産も船便の遅れなどで43%減。メキシコ産は6月中下旬頃まで入荷が続くが、「ウイルス禍による影響が解消されても、作付面積の減少に加え天候不順による不作で前年比1割くらい減少しそつ」との予測。プロッ